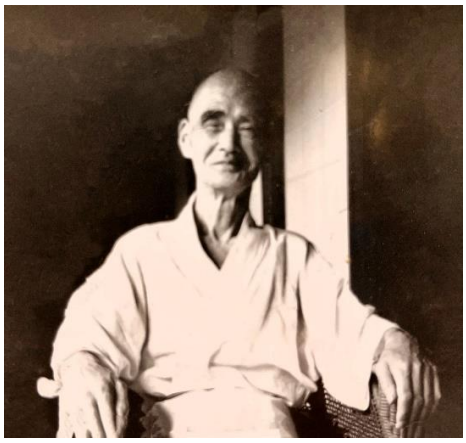
『 長 田 風 土 記 』



冨士　顕道　著

はしがき

去る昭和 43 年 6 月 23 日、長田神社で津田宮司司会の下に長田財産区管理会会長、芳岡、谷本、両氏のご好意で敬老会が催された。

丑年、満 80 歳を迎えた老生もお招きに預かり、出席させていただきました。さだめし大勢の会合で、昔の思い出話でにぎわうことであろうと思ったのに、案に相違して、その少数なのに内心さみしく思いました。女は別として、男では最長老の道尭伝次氏に次いで、会長の吉岡さん、福聚寺の足立恵補師、松本富蔵氏に老生の 5 人で、他はみな宮総代、氏子総代等で 80 歳にはまだまだ間のある方々でありました。以上 5 人の中でも真実に長田で生まれた人と言えば、道尭に吉岡の 2 人で、足立、松本、老生は他からの入り込み人です。たとえにも「武蔵に草はくさぐさあるけれど、摘み菜にすればさても少し」で、広い長田で本当に地下で臍の緒を切ったものといえば、ただの 2 人とは寂しい限りでありました。にもかかわらず、終戦後は日本の美徳であった家族制度がなくなり、いわゆる年取ればよそになされていにしえを、談るをだにも聞く人もなき」今日この頃なのに、敬老会を催し、なおも命長かれと神に祈り、心温まるお言葉で慰められた上に、饗応やお

土産までいただき、半日を楽しく過ごさせていただいたことは、老いの身には忘れがたい思い出となり、誠にありがたく喜びに絶えませんでした。お世話くださった皆様のご厚意とご労苦を心から感謝いたします。その節、主催者の谷本氏から、昔の思い出を飾りのない地下の言葉で話してくれと、特に指名され、仕方なくしばらく話しましたが、あまりにも突然のことで意を尽くさず、自分ながらしどろもどろで恥ずかしく思いましたが、これをチャンスに長田や明泉寺大日付近に伝わる古跡や伝説、および人の暮らしなど、語り伝える年寄りが年々亡くなり、昔のことは滅んでわからなくなるだろうから、今のうちに私が子供の頃から今日までの地元の移り変わり、見たり聞いたりしたことの一端を、思い出すままに文字に書き残しておくことも、あながち無駄でもあるまいと、自惚れの心抑え難く、後年何かの参考にもなればと、おこがましくも長田風土記の拙筆を進めてみたいと思います。記述にあたって、先輩諸氏のご高説の一部を拝借引用させていただくことをお許し願いたく、換骨奪胎を恐れますが、幸いご一覧を賜らば幸甚に存じます。

明治百年を記念して神戸市長田区明泉寺町二丁目明泉寺閑栖　丑年 80 歳、冨士　義孝誌

【長田さん】

伝説によると、太古、長田さんは現在のところより、2 キロほど奥に明泉寺大日と名倉の中間に、独立した前後二つの山があり、「今の天神町」明治の頃までは、前の山を前天神、後ろの山を後ろ天神山と呼び、古名を宇名出の丘と称し、長田の里人は出雲から事代主の命をお迎え申して、我らが守護神、長田の氏神として、この山の頂にお祭りしたのが現在の長田神社の起こりで

あると聞いている。 それが今のところに御遷座になった理由は、例えば伊勢の大廟は、元丹波の大江山のふもと、河守から 11 代天皇の御世に現在の地にお移りになり、伊勢神宮として、現人神の根元であるが、河守のほうも元伊勢として今に立派にお祭りされてあり、私は終戦直後にお参りしたが、社頭の神木、杉の大樹は世にも珍しく、白雲の去来する青空にそびえてものすごく、神代の昔をしのぶにふさわしいものでした。 こちらの前天神山の頂には杉ならぬ樹齢数千年と思われる老松があたかも大熊がうずくまるような姿で枝を張り、いかにも由緒ある伝説の山らしく尊ばれていました。ところが、長田の若者によってこの木が切り倒されたのを聞いて、子供心にも「ああ、良くないこと・・」と嫌な気がしましたが、やはり松の魂の祟りというのか、さしも豪気な男も、まもなく原因不明の病気で倒れたということを耳にしました。 前天神山、後ろ天神山の間の谷をいちご谷と呼んでいました。深くて恐ろしいジャングルのようなところで、枝を広げてトゲのある木がたくさん茂っていました。 この中に分け入って枝をひっくり返すと、その裏に琥珀色のきれいな木苺が鈴なりになっていました。 私たちはよくいちご狩りに行ったもので、その美味しいことと言ったら、数あるイチゴの中で一番だと言ってもいいくらいで、今でもその味が舌によみがえってきます。イチゴのある谷だからイチゴ谷というのだとばかり思っていましたが、本当は長田の神に仕えるイチコ、「巫女、穢れにそまぬ純な乙女で、お神楽を舞い、神霊を迎えてお慰めする舞姫、市子」が住んでいたという伝説から名付けられた谷であることを後になって教えられました。 この谷も最近は住宅が立ち並び、イチコならぬ市民「市子」の住む谷となり、昔の野趣味も楽しさも影をひそめ、殺風景なところとなってきました。 後ろ天神山の頂に、長田さんが祀られていたらしく、思うに、前天神山は本宮を祀るための祭壇、つまり今でいう拝殿に当たる丘であったのではないかと考えます。

私は去る年の夕方にこの山の頂に久しぶりに登ってみておどろきました。昔は樹木が繁り、私も若かりしためになんとも思いませんでしたが、この度は寄る年波のせいと一本の樹木もなく、段々畑の急傾斜も荒れ放題、一度足を滑らせたら命がないと思えば恐ろしさに震えました。思えば、去る年の戦争で伐り得、取り得と心ない人の乱伐が続いて、そのあとは段々畑となっていました。唐人の言葉に「耕して天に至る。以って負うることを知る」というのがありますが、当時、食糧に苦しむ人々は、生きんがために麦を作り、菜っ葉を植えて、乏しい食料の足しにして、お腹を満たしておられたようでした。喉元過ぎればなんとやらで、平和になれば気が緩み、畑は平地に下り、山はデコボコの荒れ放題で見る影もない、哀れな姿にびっくりしました。由緒ある両天神山もかくのごとくにして、時と共に消えてゆくのかと思えば、現在各地に古跡や古墳が発掘されつつある時に、太古より明治大正の初めまで、元長田さんが祀られてあった天神山として、崇められてきた聖山の変わる姿の哀れさに感慨無量、私は寂しく悲しく、胸の詰まる思いがしました。昔はこの山の頂に立つことさえ、恐れ戦いた当時のことを、知る人も語る人もなくなりましたが、今でもこの辺りを深く掘って見れば相当な肥え松でしたから、松根の芯くらいは出てくるかもしれません。

【後ろ天神山と行場】

後ろ天神山に近年祀られた水天宮は福原の都を開き、また神戸を今日あるに至らしめた大恩人平清盛公の御孫で 80 代安徳天皇様を祀ったもので、壇ノ浦の悲劇にちなみ、海上安全を願うために祀られたものであります。創祀は確か昭和の初め頃でしたが、この山も幾度となく衣替えをして、近頃やっと地肌を見せぬまでに若い雑木が茂るようになりましたが、元の美しい原始的な神々しさ、長田さんの元宮の伝説の山という感じは、残念ながらどこにも見出すことができませ

ん。前後両天神山の裾を流れる川を苅藻川といいますが、曲がりくねったこの川も、ここまで登ると大渓谷の観を呈し、通称「行場」と言われたところで、奇岩あり、滝あり、紺碧の淵もあって、行場という名から考えて、長田さんにお参りする人は、昔ここでみそぎをして心身を清めてお山に参詣されたものでありましょう。現在、神社仏閣に詣でて、口をすすぎ、手を洗うのは全身禊の略と言われています。この行場のあたりは、渓谷美の最も優れたところで、白雲は天神の嶺頭にあって静かに流れ、水声は人の心身を清め、樹木鬱蒼として、その静寂な雰囲気は太古の姿を再現したものとさえ思えるほどで、私の子供の頃は夏は涼しく、水遊びでにぎわったところでありました。現在でも上の道路から覗くと、ちょっと凄みのある渓谷で、遠くから見れば美しく、今もなお昔の面影を止めているように見えますが、近づくとゴミだらけで哀れにも悲しいところと成り果ててしまいました。

【長田さんはなぜ現在のところに祀られたか？】

　それはこうである。すなわち 14 代仲哀天皇には新羅、百済、高麗の三韓を征伐なさるにつき、八百万の神々のご加護を願われ、途中不幸にも天皇には御崩御になったが、神功皇后の御遺徳によって、無事に凱旋の御船が瀬戸内から現在の御船通り、すなわち長田区役所と税務署の附近に記念碑のあるあたりに着いたとき、ご苦労様でしたと、まず長田さんには元の天神山へご帰還を願わんものとしたのに、事代主の命は「我、鶏鳴の聞こえる里の守護神とならん」と、すなわち、山の頂ではいわゆる雲の上の人で、庶民との親しみも薄いからと、例えば王位継承の皇太子が軽井沢のとりもつ美しき恋のロマンスの、また義宮にも津軽の花子さんと結ばれ、雲の上の人でも現人神でもない、王族では型破りなことを示されてより以後、国民との親しみは格別である如く、事代主の命は神代の昔に、はやこの理に徹し、現在の長田の里に鎮座ましますことにな

り、今日に至るものであるかのように古老から聞いております。

【鬼追い】

長田さんの祭典行事のうちで、一番子どもの頭に残っているものは、なんといっても年に一度の鬼追いである。この行事は毎年２月３日、閏年は４日が節分と言って、いわゆる神さんの正月で、この日から新しい年へ越すために悪魔を祓う追儺式のことである。昔は今のような騒音はなく、静かなること太古のごとしで、当日は昼から３時頃になるとププードンドンと吹き鳴らす法螺貝と太鼓の音が、遠く明泉寺大日までも聞こえてくると、たとえ忘れていても、「わ～鬼さんや！」と子供はたまらなくなり、草履履くのももどかしくお宮へ走ると、一番太郎の赤鬼が麦わらのたいまつを振りかざしながら、社前で舞い、次いで青、赤、青と五匹の鬼が出揃うのは夕方で、この時、近き将来、鬼を舞う家柄の、昔なら前髪の坊やが羽織袴の小姓姿で、太刀渡しとて腰をひねって、ピカピカ光る日本刀を鬼へうまく渡すと、大役を終えた子供も親もやれやれと思ったもので、渡された鬼は刀を肩に五匹の鬼がたいまつを振り振り、社前での乱舞は、ちょうど夕闇迫る雰囲気と松明の火が刀に光り凄く、神秘的な感じが起こる。この瞬間をクライマックスに先頭の鬼から順々に奥の岩屋へ引き下がり、最後の一匹がまだ舞っているうちに現れ出ずるは、今日の大物、即ち餅割りと尻くじりの二匹の鬼で、見るからに恐ろしげな姿に、観る人の視線はこれに集中するために、先刻まで花形であった五匹の鬼は何時しか消えて、舞台は変わる。餅割りと尻くじりは法螺と太鼓の音に合わせ、身振り面白く立ち回る。思うにお供えの餅欲しさにまさかりを手に、抜き足差し足で神前に近づくが、神罰を恐れて容易に近寄れないのを、尻くじりの鬼がそれ行けやれ行けとものすごい槍で尻をくじる。すなわちテコ入れをするしぐさのように思える。やがて餅割鬼は尻くじりに強いられ、思い切ってお鏡餅に向かって、エイッと力任

せに打ちおろしたマサカリの音のあまりにも大なるにびっくり仰天、神の怒りを恐れ、岩屋を指して韋駄天走りで、今日の鬼追いは終幕となるのであるが、時は2月3日、寒くて暗い夜道を大日まで帰る道すがらも、鬼の姿がちらつくようで、つまずく小石の音にさえ恐怖心を抱いたことも、はや７０余年も昔の思い出となる。近頃は騒音に遮られ、法螺や太鼓の音も聞こえず、鬼さんも明るいうちに終わり、昔のような神秘的な光景は薄らいだかのように思います。

【年越しと初空襲】

昭和20年は閏年で4日が節分でした。この時分はまだ日本は連戦連勝の夢を見て、鬼畜アメリカを打払への声盛んな時でしたから、長田さんでも戦勝祈願と鬼追いの行事が営まれていたと思います。私は当日、長田橋の近くで坂本という家の葬式で、式も終わり、二階で帰り支度をしていると、突然、東から西に向かって飛行機の爆音と変な音を耳にしたが、戦争中のこととて気にもしませんでしたが、間もなく長田神社から西の方が非常に騒がしく、今のは敵の投弾機で育英等被害ありと聞いてびっくり、敵機はなお頭上を旋回しているので、恐怖心に襲われ、しばらく押し入れに身を潜めていると、表の通りがにわかに騒がしくなり、何事かと出てみて、またびっくり、つい目の先にあった番町の金楽寺の大伽藍が焼け落ちようとして、尚立派であった鐘楼堂にも火が移り、黒煙と共に紅蓮の炎を噴いている光景に唖然とした。山名宗全、細川勝元の応仁の乱を、今見るように思いました。下の方からは山に向かって避難してくる群衆は蟻の巣をつついたような人の波に、これは大変と私は人並みに押されながら、空を踏む思いで帰ったが、幸い明泉寺大日は無事であった。下の方は、黒煙天を覆い、もの凄く、それは吉田町の鐘紡紡績や増田製粉、日本製粉などが焼けている光景であった。増田製粉の如きは、その後三か月ぐらいもくすぶっていた。初めてただ一回の空襲で受けた被害の大きさに、23年後のただ今でも、思い出す

と新たな恐ろしさに筆持つ手が震え、初めて知る空襲なるものの恐ろしさ。でもこれは序の幕で神戸が焼け野が原と化したのは、その年の 3 月 17 日と 6 月 5 日の大空襲であったことは生涯忘れることができず、長田の鬼さんの日になると、悲しみと怒りと残念さを新たにします。

【高津山の宮相撲】

今はむかし、長田の地下（じげ）に石橋栄太郎という図抜けて大柄な子供が産まれた。その頃、兵庫の東柳原に秀の海、玉出石、高津山など立派な関取がいました。石橋の栄たんは高津山の弟子となり、ついには親方の高津山を襲名するまでに出世されたときは、明治の終わり頃であったかと思いますが、お宮の境内ただいま能舞台のような建物のあるあたりに四本柱の土俵を設け、襲名披露の大相撲が催されました。地元であり、長田から出た石橋の栄たんが、その頃名代の大関高津山を襲名しての花相撲だから、大変な人気で広い境内も人で埋まり、ガキどもは危ない石灯籠や森の木に登り、筆者もそのうちの一人であったことを白状します。相撲の番数は時と共に進み、いよいよ高津山の番になりました。相手の関取の名は忘れましたが。栄たん高津山の連呼と大変な贔屓で盛り上がるようでした。村人は皆栄たんに勝たせたい一心ですが、勝負のことですから万が一負けたらと思う心配で、人々の思いはまちまちで、やがて激しい火の出るような取り組みとなる。そのうちに相手の関取も必死で、勝たんがために喉輪をかけた。かけられた高津山はみるみる内に顔を真っ赤に、また青く苦痛に耐えている。人は皆、同情して卑怯や、逆手や、むごいなどと、相手の関取を罵り、地団駄踏んでいる人、木の上の子供までが身の危険を忘れて応援していた。一時は息の根が止まるのではないかと思ったが、さすがに黒だけあって九死に一生を得る手は心得ていたらしく、ついにカンヌキの手を外すと同時に、相手を土俵に叩きつけた。思うに両手にのみ力を取られ、全身に隙があったらしく、故に危ぶまれた勝負が逆に好転

し、文句なしに上がった軍配に、お客は総立ちとなり、何でもかんでも手当たり次第に土俵へ投げる品物で、たちまち大きな図体も埋まるくらいで、中には熱狂のあまり裸になっている人もあった。栄たんは喜びを隠しきれず、こみ上げてくるものを抑えてニンマリと笑顔で示す喜びの目には光るものがあった。残念なことに、その後の高津山は年も若く、親方の怪力には及ばず、少々荷が重すぎ、体にも故障があったらしく、晩年は元の栄たんに帰り、気楽にウロチョロされるのをよく見受けたもので、長田商店街の某呉服店の細君は栄たんの娘さんであると聞いてはいるが、どんな別嬪か私はまだ見たことがない。

【私の子供の頃の長田さん】

昔は境内を通り抜けることができた。すなわち、現在、川を玉垣に沿うての道は広い川原で、上ンジョ、すなわち西山町の方への通行道で、現在、宮司社宅を右角に畑田の屋敷を左に見る道へ渡るに、橋はなく、大きな飛び石を七つ八つも飛び越えたもので、故に大水のときは難儀したものでした。

次は拝殿に向かって進み、神前でお礼をして裏へ抜ける道であった。神殿の裏は樹木がうっそうとして昼でも薄暗い原始林で、奥の突き当たりには立派なお稲荷さんが祀られ、なお右脇に榎の大木があって、幹には注連縄が張られ、赤鱓（エイ）の絵馬（痔病祈願）がたくさんなことぶら下げてあり、ちょっと薄気味悪い感じがした。これに並んで西北の角に鬼の岩屋があって、開くのは年に一度、2 月 3 日の節分の日に限り、鬼に出る若人が支度するところであるが、子供は鬼蔵前をとても怖がったもので、岩屋の裏にも出入り口があって、ここを出ると、明泉寺大日への道路となる。

長田さんの鎮守稲荷の前に、寿司繁こと浜田繁造爺が営む掛け茶屋、すなわち軽食堂があっ

て、長田さんや鷹取山にお参りした小原庄助はこの店に入り、こんにゃく炊き、関東炊きのことで、一杯5銭のコップ酒を楽しみ、クダをまいていた。この掛け茶屋の裏の流れが、大日から流れてきた苅藻川であるが、お宮に沿うて流れる間を宮川と改め、渡るに立派な橋がかかり、橋上からは遠く明泉寺方面の山並みが広がり、橋下は名に相応しき宮川の流れ、夏は涼しく、秋の紅葉は流れを染めて美しく、この橋はお宮を通り抜けて高取山へ登る人のために掛けた橋であったらしいが、お宮も次第に社格が上がるに従い、権威と風致を保つために、昔は叡山と日吉神社のように持ちつ持たれつで繁盛した高取山とは縁を切り、橋は落とされ、通り抜けは相成らん、で一番痛手を受けたのは寿司繁であった。昔は冬枯れ三月と言って、90日の間は寝食いで、寂れたものであるが、鷹取山に限り寒参りとて、昼は無論のこと、夜は野施行で、狐に赤飯のおにぎりなどを施すという賑わい。遠くから見ると山へ登る提灯の火が続き、実に壮観でした。したがって寿司繁の店はてんやわんやの大繁盛であったのに、橋は落ちる、通り抜けはあいならんで大きな打撃を受けたが、幸い親思いの寅吉という息子が、西宮の白鹿の辰馬へ大旦那だけの料理人になられたと聞いて、真実に他人事ならず嬉しく思いました。

【絵馬堂と茶店】

寿司繁とは別に、今一つ茶店があった。それは現在の絵馬堂、今の社務所の地にあった頃のことで、ここは谷本勘兵衛爺さんの細君が隠居仕事にミカン水、ラムネ、お菓子などを売り、「ようお参り。おやすみやす」と招いた。お客は、絵馬堂で茶を飲み、菓子を食べながら、流れも清き宮川で水遊びする子供らに気を取られていると、うろちょろしている鶏に菓子を突つかれても、長田さんのおつかい鳥なれば怒る人もなく、今から思えばのどかな情景であったことを懐かしく思う。ところで、不思議なことに、寿司繁の息子は包丁が良くて辰馬に収まり、この婆さん

の息子すなわち、谷本貞治氏は、神戸の市会議員となり、市の台所を牛耳る身となられた。どちらも食い物につながる縁になって妙なもんでんなぁと人と話したことも。今では皆故人となり、夢のようで、知る人も語る人も年々煙のように消えてなくなるのは寂しいことである。

【社頭を飾る宮前風景】

昔の宮前風景を時折思い浮かべると、子供の頃が懐かしくてなりません。宮川は昔は川幅も広く、流れも清き青い流れと白い砂で、そこにかけられた朱塗りの御橋、すなわち八雲橋は社頭を飾る風景として現在も重きをなしている。同じく社頭を飾るのは二代目となる素晴らしい欅の大木である。私が子供の頃には親木の股にできた実生が太るに従い、親木を張出し、桶の輪が切れたようになって、枯れた根本を石垣で囲い、保護されていたが、それもいつともなく無くなり、親を離れたゴンボ根が幹となった。始めは変なものであったが、時がこれをカバーして、現在では立派な幹なり、枝振りまでが面白く、宮前風景に千金の重みをなしている。春の芽生え、青葉の涼しさ、秋の紅葉は楓のあでやかさに比して渋味があって寒木として、欅ならでは見られぬ風格を保ち、社頭を飾るにふさわしい名木である。昔はこの木の脇に弥右衛門さんの綺麗な茶店が有り、青葉に覆われた下の床で参詣者を憩わせていた。この店では孫を連れた老婆が炭団に鉄板を置いて餡巻きを焼いていた。床几で孫は一本5厘のミカン水を無心に飲みながら赤い鼻緒に後ろ掛け草履の足をピンピンさせている。老婆は突然鳴き出した鳥を見て、「あれ見い、鳥があくびしている」と孫に教えると。「オバン、あくびと違うで、鳴いてんねんや」思うに老婆は耳が遠いらしく、孫のあどけない手話の面白さに気を取られ、狐色に焼かねばならん餡巻きの皮が焦げてしまうなど、昔はすべてが長閑であった。八雲橋の名は御祭神事代主命には故郷を遠く離れてさぞ寂しかろうと「八雲さす出雲八重垣・・・」の古歌を引用したものと思う。当時、この辺

りの風景を誰が描いたか写生して、西山町の大久保文蔵さんの家に貼り交ぜの屏風の中に保存されてあるのを拝見したことがある。

【賽銭泥棒】

昔からお米は尊いもの清いもの。銭は何者の手が触れているかわからない汚い穢れたものと思い、言われたもので、銭を触れば必ず手を洗わされたものである。ゆえに神仏共にお供え物の最高はお洗米と言ってお米であることは今も昔と変わりがない。故に心願あるものはお洗米の代わりに「うちまき」と称して白米をお供えしたものである。それがいつとはなしにお金が混ざり、現在ではお米はまばらで、いわゆるお賽銭が主のようであるが、長田さんでも昔はお米が主で、お賽銭は副で夕方になると庭掃きのじいさんが本殿、末社の賽銭箱を開けて回ると、たくさんなニワトリが出てきて、ばらまかれたお米をついばむ光景は壮観であった。なお、残ったお米は貯めておいて貧しい人に安く譲り、１０銭の銀貨、5銭の白銅は社務所に、2銭、1銭、5厘の銅貨は桶に入れて拝殿の右脇にあった蔵に収めてあった。このことを嗅ぎつけた忠助が、蔵の壁に穴を開け、濡れ手で粟のつかみ取り、誰知るまいと思いの外、神罰てきめん恐ろしや。人の噂も 75 日と申すがそろそろよかろうと使い始めたのが運の尽き、そのお金には米糠がついていたところから足が付き、御用の縄に縛られて、暗い牢屋へ送られた。これがほんまの糠喜び。たとえ 5 厘のお金にも心願こもるお賽銭。道に外れたことをすれば、神罰受ける身の因果。知恵第一の干支頭も、糠から足がつこうとは。ぬかったことをしたわいと、さぞや悔やんだことならん。

【石の鳥居】

長田神社に立つ東西二基の石の鳥居は、東尻池の石丸甚兵衛老人が喜寿の祝いを記念して寄進されたもので、家の方は大空襲で亡くなったが、鳥居はお宮のシンボルとして永久に残る。同

じ鳥居でも日本一を誇り、山下太郎が建てた楠公さんの鳥居は倒れ、折れた柱の一部が湊川神社の立石となって名残りを止めているが、品川源兵衛が献納した境内の鳥居は今も健在である如く、石丸じいさんが奉納した長田さんの鳥居も永久に健在ならんことを念じている。元は西脇に同じ位の松があって、太い注連縄が張られてあったが、いつしか枯れた松の跡へ鳥居が立ち、東の方は民家が立ち並んでいたのが現在の如くなり、また近くにある2本の楠の大樹も元は道路の脇にあったのが、境内に入るように改修され、今では立派な神木となり、私が子供の頃から思えば内外共に隔世の感がある。平和の象徴、恵比寿の神の本家、本元、商売繁盛、福の神としてお参りの多いことは神戸一である。明治時代の社殿は今よりもっと神秘的であったが、惜しくも大正13年1月2日午前2時頃の出火で炎上し、現在の社殿は藤巻宮司時代に再建されたものである。

昭和20年3月17日の大空襲には、社殿はもちろんのこと、兵庫県下随一を誇る樟樹の森にも被害がなく、誠に幸運であった。もし焼けていたら、建築は別として、森の樹は人の力では作れない。ただ、欲を言えば、境内に昔のように鶏がたくさんいて、長閑でもっと神さびた風格があってほしいと思うだけである。

【宮司さんの『歌人西行』】

西行法師についての本はいろいろあるようですが、私は高根政次郎宮司さんからいただいた『歌人西行』が内容はもちろんのこと、装丁共に優れていると思う。西行が足に任せ、気の向くままに見たり聞いたり、体験したことを三十一文字にまとめて詠んだ歌や足跡の広さに今更ながら驚くばかり、宮司様には長年にわたり心足るまで求めてやまずできた『歌人西行』はたゆまぬ努力の結晶と有難く拝受、感謝感激、永久に明泉寺の寺宝と致します。

高根宮司はその後、お多賀様にご栄転になり、国のために命長かれと念じておりましたのに、昭和１０年１月７日、是法平等無有高下で上は王侯貴族より下は乞食に至るまで、平等にして高下なきは、宿命とはいえ、惜しい方を早く亡くしたと、私は驚きと落胆に胸の痛む思いがしました。でも、遺された『歌人西行』は読む人の心を和らげ、みちしるべともなり、たとえ永眠なされても、霊に生きる方であることを信じて疑いません。いたずらに長生きするも害あって益なき我身を恥ずかしく思うにつけても・・・・・

【よそにない困ったこと】

それは下ンジョ、すなわち八雲橋を渡ると馬場で、右側は何事でもないが、東側すなわち左側に死人ができたときである。葬式がお宮の前を横切ることは不敬に当たると、葬列の横断が許されず、故に葬列はお宮の東垣根に沿うて大廻り、長福寺の前から苅藻川の河原に下り、先に述べた境内から鷹取山へ参詣のために架かる橋の下に、その日に限り俄か作りの板橋を渡し、道尭伝次氏の屋敷の石垣と川の流れに沿うて下り、先頃、昭和 43 年 7 月 24 日、米寿を前に亡くなられた満井成吉宮司社宅のところで道路に上がり、畑田源左衛門氏の横から、当時、長田一番の長者で、今に残る大西治作氏の家屋敷の前から、西の寺、すなわち福聚寺を右に見ながら墓地へと葬列は登ったものである。当時の葬式は現在と違い、諸行無常の紙旗を先頭に、花や盛物から葬具一式を、一人が一品ずつ持っての行列なれば、軽いものは良いが、山と盛った餅や果物が、名指しによって当たったものは気の毒であった。続いて寺方、位牌持ち、輿は 4 人で担がれ、親類縁者は白の装束、紙鼻緒の草履履きで、なお、田舎の習慣で村人のほとんどが見送る長い葬列なれば、折悪しく雨または増水の時の川渡りは大変な混雑で、時には葬式を伸ばさねばならん事もあった。なかんずく、中ンジョ、上ンジョの者にはこの悩みは無く、同じ村でありながら、氏神

さんも聞こえません、と愚痴をこぼす人もあった。昔の人は正直で敬神の念が熱く、古来からの習慣をよく守られたものと思う。でも、この習慣は神意にあらず、世話する人の神に対するゴマスリであるかもしれませんなあ・・・。

人生まれなばお宮に参り、死なばお寺へと、自然法則で決定されているようなものなるに、生を喜び、死を嫌うは習いではあるが、諸行は無常であり、いかに科学が進歩しても、これを人の力で左右することはできない。たとえ百、二百と長命ができても、死というものがなかったならば、定めし困ることになろうと思う。いわんや、今日このごろのようにジジ抜き、ババ抜き、などと悪い言葉のはやる時代においておやである。

【川施餓鬼】

昔はお宮の裏、長福寺の前の川原においてお盆すなわち 8 月 16 日には川施餓鬼が、毎年営まれた。これは現在のわれわれが他界の亡き人々の霊魂を呼び迎えて慰めるとともに、お互い人間が生きんがためには、心ならずもあらゆる動植物を犠牲にせねばならぬ故に、それら三界の万霊の恩に報ゆる、つまり祭り手のない無縁仏を、俗に餓鬼というが、この霊に対して、たとえ年に一度なりとも施しと報恩の心を表す行事法要を施餓鬼という。今の世の縁なき若人の中には、餓鬼にものを施すどころか自分が施しを受けたいくらいだ、と一笑に付すかもしれないが、何も高価なものを施す必要はない。例えばパンの粉でも蟻にやれば立派な施しである。私は食後に必ず防火水槽でうがいをすることにしているが、魚もよく知って、私が近づくと集まってくる。うがいの水に混ざる口中のモロモロが欲しいからである。幼い鯉が入り乱れて、粉雪のように落ちる口中のモロモロを食う光景を見ていると、とても綺麗で可愛く、魚も喜び、私も大いに慰められている。心掛け次第で施しとか恵むと言うことは、案外手近にあることがわかるような気がす

る。これも施餓鬼に通ずる行為のように私は思い、毎日続けている。そのためか、幼魚も次第に太ってきたように思う。昔の人はものに対する恩を深くありがたく感じたものであるが、現在のように学問が進めば進む程、人情や報恩の念が薄らぐのは不思議である。

その頃の川上は明泉寺大日まで人家はなく、したがって苅藻川も「水を掬すれば月は手に在り」といった清き流れで、お宮の森の下を流れる区間を宮川と称し、名に相応しく綺麗な河原であったが、昨今は汚物だらけで、時折大水が出てゴミを押し流してくれない限り、人の力ではどうにもならぬ汚い見るのも嫌な川になった。昔から清いこの河原で近くの長福寺が主催、及び施主で、禅宗の寺院が随喜参加して賑やかに川施餓鬼が営まれた昔を懐かしく思う。

【大松枯れて衝立となる】

元、長田さんの境内に大小五本の老松があり、社殿に向かって右脇にあったのは、早く枯れて、地面から少し残し、それには雨除け、幹には注連縄が張られ、ずいぶん太いものでした。また東横には西側の根株に増して大きな松が二本あって、遠く明泉寺から見ると、大きな傘をかぶせたように森を覆い、また現在、石の鳥居の立っているところにも以上の三本に比較すると、息子ぐらいのが二本両脇にあって注連縄が貼られ、鳥居の代わりで社頭を飾っていた。その頃、生田の森は純楠で日本一を誇り、「長田は立派やけど松があるからなあ」などと言われたものでした。その為に松にも性根があって、肩身の狭い思いをしたのか、いつとはなしに枯れてなくなりました。通称、長田の瓦屋、谷口万次郎氏が枯れた大松で衝立を二基作り、福聚寺と谷口家祖先のために建てた正法寺へ寄進された衝立に、はめ込んである鏡板の立派であるのを見ると、如何に大きな松であったかがわかる。この松も人と同じで、お宮で育ち、屍は衝立となってお寺に納まり、理の当然なることを明示しているかのように私には思え、松魂とこしえに安らかならんこ

とを念ず。

昔から日本一を誇った生田の森は、昭和 20 年 6 月 5 日の大空襲で全焼したのと、長田の森は松が枯れてなくなったために、現在では兵庫県下随一の樟樹の森に指定され、唐人の言葉に「人間万事塞翁が馬」とは人間のみならんやである。

【地震】

昔から世に恐ろしいものといえば地震雷火事親父ときまっているが。近頃親父の株は大暴落で、再起の見込みは望めないように思うが、上の三大大関はなかなか格を下げない。

ところで、長田さんの八雲橋は日光山と同じで神橋なれば、人は別として、牛馬および荷車の通行はできなかった。ゆえに下から登ってきた牛馬車は無論のこと、人も遠慮して橋とは別に左脇に気楽に通れる道路が現在もある。私がこの道を歩行していると、突然グラグラと大地が大きく揺れるに、地震だと思わずしゃがむと、お宮の樹も揺れていた。この時が大正 12 年 9 月 1 日、午前 11 時 58 分で、関東では大地震が起こり、特に東京では地震と同時に大火災となり、たちまち阿鼻叫喚の生き地獄となり、十数万人の犠牲者が出るという大惨事が起こりつつあるなど、夢にも知らずエライ地震やなあ、くらいで帰ったことも、早や 45 年も昔の思い出となる。

次は昭和 16 年の 3 月 7 日。私は兵庫区から帰途、宮川町の交番の近くを歩行中、変な音とともに大地が揺れ出した。地震だ。両側の家からは飛び出す人で、道は人波、送電線も大きく揺れていた。どこぞ被害がなければ良いがなあ、と思っていると、果たして北但が大地震で、城崎や豊岡を中心に被害の範囲は広いと聞いて、これは大変なことになったと恐れおののいた。当時、叔父の高井石松が西村旅館に行っていたので、大いに心配した。その後、私は西村旅館を訪れ、

叔父が抱き付いたという庭の松も見た。さっきの東京は９月１日で、この年は残暑がものすごく、今度の北但は暦の上では３月でも残雪が深く、寒さに震え、その悲惨なことは表現のことばもなく、叔父が命からがら抱き付いたが、降り飛ばされたという松を見て、当時の恐ろしさに身震いした。

それにつけても神戸、特に長田付近は昔から大地が割れたり、家が倒れるような地震のあったことを聞かず、遭うたこともない。思うに国譲りの時、弟の諏訪明神の大反対に対し、長田さんは鹿島明神と穏やかな話し合いで、ドイツ、朝鮮、ベトナムのごとき悲惨なことを見ずして、大和の国たらしめた事代主の命の功績に対し、鹿島明神が大鯰の頭を押さえて曰く、時に少しくらい手足は動かしても頭（神戸）だけは絶対動かすことはあいならんぞ、と槍で鯰の頭（神戸）を抑えていてくださるためであろうと、私自身はそう思って、永久に無事ならんことをタケイカズチの大神にお願い申しております故に、多分？大丈夫だろうと思います。

【雷鳴】

地震に次いで怖いものは雷鳴で、私は特に嫌いだ。怖いのである。私だけかと思えばそうでもない。東京の大地震後、今の「エーザイ」内藤一家と共に、鳥山という生粋の江戸っ子婆さんも、明泉寺に避難してきていたが、ある日、私の不在中に地震が起こり、家内や娘は怖がり裸足で飛び出し、鳥山さんに縋り付くと、「なんですか？地震なんか怖かありませんよ」、と涼しい顔でたしなめたのに、その後、雷が未だ鳴りもしないのに座敷の角に頭を向け、お尻を上げ、身を震わしているので、「鳥山さん、どうした気分が悪いですか？」と聞いても、それには答えず、浅草の観音様から授かった雷除けのお守りを両手に、畳に頭を擦り付けて、「雷様、雷様」で青くなっているので、可笑しいやらあほらしいやら、いくら気の強い江戸っ子でも怖いものは怖くて、

私ばかりでもないと思った。

ある日、長田から帰るなり、ものすごいのが鳴り出した。早速押し入れに入り耳を抑えていたが、良寛さんではないが、「もういいかい」と出ると、先刻のは近くへ落ちたとの事に、翌日その木の下に行って驚いた。その木は明泉寺から夢野へゆく細道の左脇にある楡の大樹であったが、昨日の落雷で梢から引き裂かれ、皮の剥けた甘肌からは、カブトムシの好きな甘汁が流れ、人間なら血みどろのような立ち姿を見て愕然とした。

またある時、長田の増田山の西の角に、幹の太い大松があったが、これに雷が落ちた。雷火で焼けた傷は漆喰で保護され、それが白く梢まで登っているのが遠くからでもよく見えていた。

昔は雷とは猫のようなものらしく、落ちるが早いか少しでも高い所へ掻き登ると雲が迎えに来る。その証拠に傷跡には掻き登った爪の跡があるなどと思い、信じていた。また、ある年の 6 月に、兵庫の福厳寺の墓にあった大松に雷が落ちた。真浄寺の庵主さんの曰く、落ちた瞬間、障子が真っ赤になり、生きた心地がしませんでした、と申された。この大松も梢の方まで皮が剥け、雷の威力の恐ろしさを見た。この皮は歯痛のまじないになるとのことに、今も保存してあるが、80 の老僧で総入れ歯では、せっかくの皮も使い道がない。この松はまもなく枯れたので、板にすれば素晴らしい板が取れると思ったのに、明泉寺を建てた絹屋こと橋本寅之助棟梁の曰く、雷の落ちた松はいくら立派でも肉離れ、すなわち年輪が離れるからあきませんとのこと。大きな松でも受けたショックの恐ろしさを知る。

これほど恐ろしい、また、私の嫌な雷でも、四方の山を見下ろして雷さんを下に聞く富士山や御嶽山では少しも怖くなかったのが不思議であった。私は疲れを休めながら、小屋の窓越しに雲海を見下ろしていたが、見慣れている稲光と違い、平らに走るかと思うと同時に、パリパリと

空間が引き裂けるかと思う凄いのが鳴り渡る。いつもなら耳を抑えてクワバラクワバラとなるに、平気でこの光景を見ていられるのが不思議であると思った。

俵屋宗達描く虎の皮の褌を締め、太鼓を叩いて走り回る雷なるものの正体を見るには、またとないチャンスと源三位頼政気取りで見張っていたが、音はすれども姿は見えず、本にお前は何とやら、で失望したが、飛行機の場合でも、落ちはせんかと思うから怖いので、雷鳴も自分より下で鳴っているから、落ちないと決まれば、恐怖心は起こらず、見ていられるのが、今でも不思議に思っている。ただし、この光景は雲海を下に見ているときに限り起こる自然現象であろうと思う。

雷よりもなお恐ろしく怖い思いをしたのは、戦時中 250 キロの爆弾が大空から落ちてくる時の恐ろしい音であった。ある日の朝、明泉寺の上空はるかの青空を、白蜻蛉が南から北へ飛ぶと見た瞬間、初めて聞く何とも言えぬ嫌な音が流れ落ちてくる。あっ、大爆弾と直感と同時に四つん這いになるなり、ドカーンと物凄い音がした。長田の方を見ると、黒煙がもくもくと上がっている。それは村野工業高校の北側で、附近の家の戸障子は引きちぎられ、ガラス障子は木っ端微塵になっている悲惨な現場を見て、爆弾の威力の恐ろしさを知った。

またある時、長田神社前バス停留場の上、四ツ辻を過ぎる頃、突然、それこそ晴天の霹靂、たとえようもない音が刻々に大きく流れ落ちてきた。私は身をかわす所もなく、左側の長谷川という質屋の入り口の壁に身を寄せ、息の詰まる思いで固くなっていた。ドカンと恐ろしい音のした方を見ると、遠くにものすごい黒煙が上がっている。所は、中央市場の西新川橋の付近に落ち、大変な被害と聞いた。

その後、宮川町の藤田愛之助氏の裏の方にも 250 キロ弾が落ちたが、幸い不発で附近一帯は

大助かり。でもこれを掘り出し、他に移すにも、スコップ、ツルハシは使われない。ちょっとでもショックを与え、爆発したら、と思えば恐ろしくて、モグラのように土を手で掻き出す人は命がけ、怖いもの見たさの野次馬もさすがに遠慮して近寄らない。

とにかく大地が揺れるのは恐いが、空から落ちるもので怖いのは、雷と神代の昔から決まっておるのに、近頃の科学文明は火の雨まで降らすから恐ろしい。何によらず落ちることはいやだ。その点、雷は落ちてもすぐ登って姿を見たものがない。いくら源三位頼政でもこいつばかりは手に負えまい。ベテランの工夫でもこいつに触れたが最後、即仏だから恐ろしい。君子危うきに近寄らず。クワバラクワバラ「雷は鳴る時ばかり様をつけ」とは言い得て妙なり。

【火事】

ある年のこと八雲橋を渡った西側から火が出て、馬場先一体に大火事が起こった。午後の3時頃であった。長田の村では、前後に見たこともない恐ろしいことでした。その頃はまだ藁葺きの家もあり、水の便は悪くて、手桶や下げ桶で龍頭水の箱へ、井戸や川の水を運び入れる人、若人は取っ手にすがり、エンヤ！エンヤ！でポンプ押す人、水を運ぶ大勢の男女が入り乱れ、大変なことで、藁葺きの家に火が着いたら、みるみる内に燃え上がり、なかなか消えない。飛び火を恐れ、どこの家にも屋根には旗が風にはためき、風下の家では家財道具の持ち出しで大混乱。屋根の上に旗と思ったのは、旗ではなくて女の腰巻、すなわち湯文字であった。これは火伏のまじないで、古くて汚れているものほどご利益があると昔から信じられ、なかにはスケベ野郎の欲しがりそうなのも風に吹かれ、煙の中の満艦飾は今から思えば壮観でもあった。このような光景は50年くらい遅れておる田舎へ行けば、今でも見られるかも知れないが、長田付近では再び見ることはできない。

火事で恐ろしかったのは、先に長田の鬼さんのところで述べてあるが、番町の金楽寺の大伽藍が焼け落ちる光景を間近に見た時ほど、恐ろしく怖いと思った事はない。これはただの火事ではなく、敵機の空襲によっての火事だから、誰も消火どころか、恐れおののき、ただウロチョロと、気はそわそわして落ち着かないとは、このような火事の光景を間近に見た時の気持ちを表現した言葉であろう。以上のような体験は再びあってはならない。戦争による火災は特に恐ろしく嫌だ。

明泉寺にもお寺の直下に藤田吉兵衛、平尾芳兵衛、谷中甚兵衛と三軒、大きな藁葺き屋根の家が並んでいたが、真ん中の平尾の家から火を出したために、藤田と谷中は貰い火を防ぐのに、麦わら屋根にむしろを敷いて水を流し、村人一同必死の努力で両家とも助かった。当時、消火に働いた人の話によると、飛び火の粉、及び流れ来る火炎でも大勢の人が気を揃えて、ワーッと追い返すと、一時は難を逃れることができる、と体験者から聞いたことがある。何事によらず一致協力の力は不可能を可能ならしめることがままある。

昔から明泉寺大日八軒と言われた村に、現在では昔の家はなく、その屋敷跡には数十軒の家が立ち並び、昔のように広々とした長閑さは無くなった。とにかく火事の恐ろしいことは昔も今も変わらない。石でさえ一度焼けたらボロボロになるから何もかもおしまいである。火の用心！火の用心！

【長田商店街、昔と今】

長田町では神社前商店街と後からできたバス道の角から、片山町の方へ登る左側に摂津の国八部郡（やべごおり）林田村の内、長田村の郡役所があり、田舎には珍しい和洋折衷の建物の横には、欅で作った火災用の竜吐水、すなわち手押しポンプが吊り下げられ、水の入る箱には長田

村と大きく彫り込んであったのが印象に残る。

それから下へ、現在のういろやの向かいくらいなところに、火の見櫓、すなわち半鐘があった。今では消防署以外に火の見やぐらを見ることはなくなったが、昔は半鐘が夜中に鳴ると、耳をすまして数を聴き、遠いところとわかれば、いわゆる対岸の火事で、再び夢路に入るが、チャン！チャン！チャン！と激しく乱打されるときは、すわこそ大変と飛び起きて、火元を確かめ、親類縁者の家や、近くとわかれば手伝い、または見舞いに駆け付けたものである。かような半鐘もよほど田舎へでも行かねば見られなくなったが、火事の時は消防車のサイレンよりも半鐘の方がピンときて、火事なることが早くわかると私は思う。「寸刻の遅速を競え、火の元用心、気をつけろ！」

昔はこの辺りも淋しく、人通りもちらほらで、大道狭しと道の中央を、大手を振って歩くのが一番安全であったのに、今では歩行者優先などと書かれてはあるが、これを正直に聞いて安心していたら、それこそみんな轢き殺される。道を横切るにも、信号機のあるところまで行かねば安心して渡れない。それさえも青のまだ赤に変わらないうちに、早や車は飛び出してくるから、油断も隙もなく、渡る途中にあるものや、足の悪い老人や子供は、見るからに危なく、ハラハラすることがままある。

特に長田神社前から長田橋の間は、人は皆、ドブネズミのように家の軒下をチョロチョロと伝い歩き、これもときに頭を打ったり、ものに触れたり、危ないこと限りがない。交通事故で死ぬ者は神戸だけでも毎日無いのが珍しいとは恐ろしく、交通事故とはよく言ったものである。明泉寺町を経て丸山へ上下する車だけでも２万台前後というから、危なくて心配で、老人は滅多に出られない。

【増田山】

増田山は長田村で生まれた兵庫の富豪、増田三斎の建てた別荘であった。でも我が身の栄華を誇るためでなく、天保年間の大飢饉に苦しむ村民救助の一策として、工を起こし、使役した村人への報酬として粥を施し、銀4匁ずつを与え、以て出来た山荘である。すなわち、村民救助の為に米やお金を施せば、受けた者に恩を売ることになる。それではどちらも心苦しいから、彼らに仕事を与え、働いた報酬として物を与えなば、恩に着もせず、着せもせずで、出来たのがいわゆる長田町の増田山で、当時は阿房宮とはこのようなものであったであろうかと、人目を驚かせたもので、これを人一目瞭然たらしめるには神戸市立美術館館長荒尾親成氏所蔵の西国街道長田灯籠前から眺めた増田山の全景写真を見れば、誇張でないことがわかる。

ところが、増田も事業のために零落し、豪華を極めたこの邸宅も、名称を残して人手に渡り、転々して、最後は兵庫貯蓄銀行頭取、岸本慎太郎氏の所有に帰し、その後修理を加え、一段と美を増し、紅白の平戸ツツジが満開の頃になると、預金者は全部招待され、広大な増田山を自由に解放した上に、お土産として、大阪名物粟おこしを、預金の多寡に応じ、大中小といただき、嬉しかったもので、大きな粟おこしを持つ人を見ると、「あの人はぎょうさん、預けてんねやなぁ」などと思うたものである。

ところが譬えにも「良い後は悪い」。経済の行きづまりで、今をときめいた岸本銀行も、危ないと噂が立つと、我先にと大勢の預金者が潮の如く押し寄せたからたまらない、倒産、そして大変な悲劇を起こした。その頃は、例え5厘でも切手に替え、台紙に貼り、10枚になると、郵便局へ持参すれば、通帳に5銭と記入してくれるのがとても嬉しく、岸本では「吉野川その源を訪ぬれば蓬の雫萩のしたたり」と1銭から預かることになっていたが、まさか1銭はどうかと思う

が、１０銭なら大威張りで預金ができた。このように零細な金を、まさかの時のためにと積み上げた楽しい夢の虎の子が、一朝にして消え、ために狂う人、首を吊る人、泣く人、喚く人、大変な騒ぎで悲惨なことであった。筆者もそのうちの一人で、高い粟おこしであったわい。豪華を極めた増田山も岸本銀行の破産と空襲で急転直下、今では昔を偲ぶよすがもない。

【長田の白外郎】

長田の地下（じげ）の人で、多田玉蔵、すなわち玉やんがお宮の前で外郎を売り始め、屋号を清光堂と名付けたのは、現在地下の人で最長老の道尭伝次氏である。昔はお参りしてもお土産になるような物を売る店は一軒も無く、故に白外郎は珍しくもあり、大いに当たり、店も次第に大きく立派になり、清光堂は、通称長田の外郎で名が通り、二代目卯一郎氏の代に空襲を受け、終戦後は現在のところに移り、今では一統銘菓の株に入り、玉やん時代から見れば大変な発展である。初めは外郎が専門であったが、現在は他の生菓子が主で、白外郎の影が薄いように見受ける。

昔は白と赤、すなわち米と麦の 2 種で、白は寒梅粉で赤は麦粉で作ったもので、味は無論白の方が美味いが形が小さく、麦の方は大きくて安かった。人の口は次第に贅沢になり、麦の方はとっくになくなり、現在は抹茶入りに変わり上品ではあるが、一切れ 1 銭の麦外郎を食べた頃を懐かしく思う。

外郎は山口、名古屋、小田原が元祖であるかのように言われ、古来有名である。私は先年、山口の湯田温泉で試食したが、長田の白色を見慣れている私には、色が黒くて品が良くないと思った。これも昔からの伝統を守っているものと思う。東では小田原の外郎が有名で、一度試食せんと、はや 45 年も昔のことになるが、すなわち関東の大地震の翌年の 7 月、大宮から富士山を乗

り越え、御殿場に下り、なお小笠原諸島観光の出船を待つ間に、伊東、熱海、小田原など大被害の跡を見ながら、外郎屋を訪れると、その家は外郎藤右衛門というて、立派な黒門が右側にあって、店は生菓子屋ではなく、薬店でおっかなびっくり、二度、三度、行きつ戻りつ横目で眺めたが、外郎らしいものは見えない。店に入って尋ねてみると、外郎はあるという。私は長田の外郎のように思いこんでいたので、ガテンが行かず、いろいろ聞いてみると、そんな餅菓子とは違い、薬であることがやっとわかって大笑い。この薬は透頂香（とうちんこう）と言って、江戸から京都まで水盃までして長い旅をした時代の名残、すなわち水の変わり、食あたりを心配しての道中薬で、この家の家伝薬であると。

昔、西では山口、東では小田原は京大阪に勝る繁華な土地であった。その頃、中国からの亡命者は山口および小田原に安住の地として長く住み、中には帰化する者もあった。その中の一人、陳宗敬は外郎という官職の人であった。この人が山口には餅菓子を、小田原には透頂香という毒消し薬の製法を当家の祖先に伝授した。恩に感じた藤右衛門は、彼の職名を頂き、性を外郎と改め、家伝薬として売り出した。

その頃、外郎藤右衛門に恩を受けた、当時名代の市川団十郎が恩返しのために、舞台で自ら外郎売に扮して、成田屋張りの名調子で、長々と外郎の効能を述べたために、外郎の名は一段と世に知られるようになったものと思う。私は長田の外郎が先入観で、それが薬であろうとは夢にも知らず、買いに入ったアホらしさ、でも私だけかと思いの他、先に弥次さん、喜多八さんでさえ、ご存じなかったものと見え、外郎を餅かと上手く騙されて、「これは薬じゃ」と苦い顔をしたというから、私やかとて、別に引け目を感じることもあるまい。

ところで、この家は珍しく八棟（やつむね）造りで、重要文化財に指定され、大正 12 年 9 月

の大震災にも焼け残っていたのに、今度の大空襲で惜しくも焼けた。昭和 39 年 11 月 9 日、佐藤内閣誕生の日に、内藤氏のベンツで富士山への途中、昔を思い、わざわざ訪れたが、家はお粗末、外郎の包みまで近代的で、五十三次で賑おうた時代を偲ぶ何物も見ず、せめては看板でも大きくして、小田原の外郎と名物紫蘇巻きの梅干しと共に、長く世に伝わらんことを念じて止みません。

【長田の芳岡写真館】

芳岡さんの先代は軍太夫とて、村の司、庄屋を長らくお勤めになった家柄で、屋敷は現在の東宝映画館の地に南面した立派な家であったことを薄々覚えている。

氏は元町一丁目、浜側の角の、市田写真館に勤めながら、研究に研究を重ね、現在では写真業界での長老であり、権威者でもある。お歳は筆者より一つ上で満 81 歳であるように聞いているが、お元気で矍鑠としておられ、お宮の総代、寺総代をはじめ、いろいろの責任を背負われ、長田では希少価値の極めて高い存在で、徒らに長命しても、害あって益なき筆者とは雲泥の相違である。氏を見て範とせねばと思いはすれど、日暮れて道遠しでお恥ずかしい次第です。

さて、近頃はちょっと出るにも写真機を持たぬ方が珍しいくらいであるが、今日の如く盛んならしめた元祖と言うべき人は、長崎の上野、江戸では、玉川三次に次いで伊豆の下田の下岡蓮杖と言われている。下田の城山公園には蓮杖の記念碑が立っている。彼は江戸でそのとき旗本の家で銀板の写真を内密で見せていただいた。息がかかると映像が消えると言うので、畳一畳を隔てて、覆面して見せていただいたが、その妙技の素晴らしさに驚き、これより写真術に専念して、異人に接するチャンスを掴むために下田に帰り、玉泉寺のハリスの通訳に近づき、写真の技術を授かり、その後も研究に研究を重ね、ついに成功するに至る。

当時の写真はガラス写真で。時は慶応３年頃のことであるとか。慶応４年が明治元年だから昭和 43 年 10 月 23 日がちょうど百年目にあたる。ガラス写真は湿板法といって、種板を作ると、すぐ撮影して現像しなければならなかった。

現在のごとく、手軽に持てるように改良したり、映画フィルムを発明したのはアメリカのイーストマンで、彼はこの大事業を完成させるために寝食を忘れ、研究、また研究を続け、ついに成功し、写真およびフィルムなど、この道に残した功績は大変なもので、大恩人である。

はじめはむろん、明治の終わり大正の頃でも写真に撮られると寿命が縮こまるとか、早く死ぬと恐れ怖がり、嫌がる人があったことは、今から思えば隔世の感がある。

芳岡さんにはいろいろと珍しいエピソードをお持ちのことと思い、折りあらば一度お伺いしたいとチャンスを狙っているが、こちらのレンズが古くてピントが合わないような・・・。

【川越の塩昆布】

お宮の東の鳥居に向かって右、現在、四つ辻の中心くらいのところに川越庄太郎という、尉と姥のような老人夫婦が小ぎれいな店で、自慢の塩昆布を売っていた。老人は常に山出し、すなわち最上のだし昆布を剪刀で四角に入念に切っていた。塩昆布とは言え、水や塩は少しも入れず、醤油ばかりでとろ火で心静かに長い時間をかけて、塩が吹き出すまで煮詰めるのが自慢で、味もよし、上品な代わりに高価でもあったから、心なき人に出して、美味しいからとて、がさつに食べられてはたまったものでない、珍味珍品であった。来客があると、老人はこの塩昆布を５切れほど、爪楊枝に差して、煎茶の茶碗に入れ、白湯をさしてお客に勧めていた。その美味しかったことは、今も忘れかねる。出がらしでも昆布の後味と舌触りが何とも言えぬ。自慢するだけある

と思った。これならお菓子がなくとも、上品で都合の良い飲み物であった。

この家の一人娘のお花はんは、花隈の芸者、今でははや自前のお姉さん株で、朔日と 15 日には家に帰り、花隈や柳原の芸者を連れての旦那連中が長田さんへお参りの帰りには必ず立ち寄り、裏の庭を眺めながら休息すれば、サービス満点で、帰りには塩昆布がお土産で千客万来。これも娘のおかげと楽しく気楽に毎日を送っておられた。この家は裏の庭がとても綺麗で、現在のバス道は遠くまで田んぼや野原であったから、春の若草、秋は草紅葉で美しく、今思うとカラー写真を見るようであった。

【棺桶の春さん】

昭和の初め頃に、中野春吉という、元は東京の歌舞伎座で道具方をしていた人で、通称棺桶の春さんといい、長田の奇人で人に知られ、神戸我楽多宗の別院で、珍しい変わった人だった。

芝居の道具方であった頃の経験を生かして、店は長田さんへお参りした人が立ち止まり、あー綺麗だと思うほど飾りが主で、売るものは従で、山椒昆布を名物として、人形などを売っていた。独り暮らしで、店と座敷の中間に旧式の丸い棺桶を据えて、暇さえあれば、この桶に入り、「我が物でありながら今宵は邪魔になる片手の置き所～」とか「長い浮世に短い命～」などと、都都逸や槍サビなどを得意の喉で唄いながら店番をしていたので、知らぬ初めてのお客などは棺桶から顔を出すのでびっくりしたり、珍しがったりしたものである。一日に何辺となく出たり入ったりするために、棺桶はツヤツヤ、枇杷色に光っていた。我楽多宗の別院にふさわしく趣味が広く、というても棺桶に因んだものが多く、夏の世の怪談話ともなれば、ひとかどの噺家でもあった。

その頃に比べると、終戦後はこの辺りもすっかり焼け野が原となり、夜ともなれば電燈もちらほらで、現在のように明るくにぎやかな商店街に復興しようとは、夢にも思わなかった。町は綺麗になったが、春さんのような浮世離れのした人は、今後は再び見られまい。寂しいことである。

この春さんの家に続いて、古い土壁があって、美しい老松が乗りかかったように広がり、青々して、風雅な藁葺きの大きな家があった。平井仁兵衛という人の住居であったことを覚えている。

【長田の瓦屋】

現在、片山町の方へ登る角に、昔は長田村の郡役所があり、このお役所に沿うて奥へ行くと、いわゆる長田町の瓦屋で、自分の山から出る粘土を、若い男が何遍となく足で踏んで、練り上げた粘土を形に詰めて、いろいろの瓦を、広い前庭に干し、乾いたものから窯に入れて焼いていた。

瓦を焼くには松の割り木と松葉に限られていた故に、ものすごい煙を揚げたものである。わが明泉寺の高壁に今もなお用いてある唐草には、‘ながた’と印が押してあるのは、この家で焼いたもので、昔の名残をとどめている。普通は長田の瓦屋が屋号となり、谷口とはあまり言わなかった。

その頃、この近くで長者番付に乗っていた家は尻池の末政久左衛門が 50 万円、板宿の武井が 30 万円、長田の谷口 10 万円と言われていた。昔の長者番付には家督 1000 円から載っていた頃のこととて、子供の私は「大したお金持ちやなあ～」と思ったものである。

万次郎氏の代には、屋号だけ残り、瓦の製造は止めて、長田一番の大旦那で、家も立派に新築され、取り払われた村役場の跡を入り口に改造され、外堀があって蓮の花やかきつばたが咲いて、御大名の屋敷のようであったが、惜しいかな、この豪壮の家も、去る 20 年の 3 月 17 日の大空襲で全焼した。昭和 34 年に娘さんが再び立派に復興されたが、昔の豪華さには及ばない。

万次郎氏がご先祖の追善菩提のために建てられた瓦屋山正法寺は幸い空襲を逃れ、禅宗のお寺として立派に残り。不徳の身ながら筆者がお守りをして現在に至っている。

【水神の森】

思い出を神社前の追憶に戻すと、本通りより西へ、現在、映画館のある方へ入ろうとする丁度右角に、大木の森があって、水神様がお祀りしてあった。古人の曰く、「親の恩は送れても水の恩は送れない。」水にも霊のあるものと思い、昔は至るところに水神様がお祀りされてあった。ここも苅藻川の水を引き入れた流れが、ここでちょっと淀んでいて、場所も広く洗い場として便利なところであった。明泉寺から馴染んできた水は、この辺まで下ってきても、まだ水底ははっきりと、砂も小石もよく見える程の清らかさであったから、暑い時分にはこの淀みに降りて、顔など洗う人々もあった。

【長田村の中心地】

今もそうであるが、明治の頃もこの辺が村の中心であったらしく、その証拠に北の角に郡役所があり、南の角には深山の甚やんというて、長田では桜井に代って、ただ一丁の人力車を引く人がいたり、北の角には水神の森があり、西の角には萬屋の吉岡があり、その西隣が芳岡軍太夫という、立派な庄屋の屋敷で、現在お宮の前の写真館の当主はこの家で生まれた、まこと地下の

お方で、高齢者であり、貴重な存在の方である。

この庄屋の屋敷跡へ、ちょんまげに裃姿が、断髪に洋服となったように出来たのが、長田共議所で、村では初めて見る立派な洋館であった。昭和８年５月 12 日、我が大日寺の入仏慶讃練供養の行列はこの共議所で勢揃いして、明泉寺へ練り込んできたもので、その後神戸銀行に改造され、終戦後は監物町に移転した後へ、今の東宝映画館ができたことになる。ゆえに、四ツ辻には摂津の国八部郡、林田村の内、長田村の郡役所があり、水神の森や萬屋の吉岡の辺は、今とは比較にならんが、明治の頃も村の中心地であったことが分かる。

【萬屋の吉岡】

その時分には長田町で日用品を売る店はこの家より外にはなかった。吉岡商店は、酒を主にして醤油、塩、石油から糸に針、紙より砂糖まであったが、白砂糖は見たこともなく、シロシタと称し、冬は岩のように固く、夏になるとドロドロでドベ砂糖とも言って、まことに始末が悪い。これを買うにはどんぶり鉢を持って行かねばならなかった。夏の日盛りをブラブラ帰ると、知らぬ間に風呂敷がベタベタになり、その部分を舐めたり吸ったりするのがとても嬉しかったものである。お酒は異人屋敷で頂いたウイスキーの四合瓶に一杯が 12 銭で、醤油はビール瓶に１本が２銭で、大日さんだからといって特に安くしていただいたものである。

これを一日おきに酒と醤油の瓶を袋に入れて、首にかけ両手で抱えるようにして、夏も冬も休みなしに、また、石油は蜂葡萄酒の瓶に一杯が６銭であった。夏の暑い時には石油が吹き出すために、着物が汚れると駄賃どころか、大目玉を頂くのには一番閉口頓首した。

一日おきに 14 銭ずついるお金がなくて、私が１銭２銭ともらいだめしていたお金までさらえ

て、時には5厘銭まで混ぜて買いに行く日もあって、子供ながらもお金のために内輪揉めをして、わずか14銭のお金なのに、半銭まで混ぜて出すのが恥ずかしかった。

嫌やなあと思ったことが身に染みてか。81歳の今日に至るまで、私は酒もタバコも一切呑まず、その美味しさも知らずに一生を過ごすようである。昔義侠が禹に酒を献じた。禹は一口飲んで美味いと言ったが、思うところあって義侠を退けた気持ちが分かるような気が私にはする。

吉岡商店は外から見ると、店らしくもない田舎式だが、内へ入ると色々なものがたくさんある。主人は英助という爺さんで、酒や醤油を肩にいわゆる荷い売りにて成功された方と聞いていた。いつでもニコニコとして人触りの良い爺さんであったが、私はよく殴られたものである。うっかりしていると突然に「小僧はん。今日はえらいことがあったんやで、長田さんの石の鳥居を雀が踏み折ったそうや！」との事に、わたしが「ほんまかいや？」と、びっくりするのを面白がって笑ったり、またある時には「小僧はん。綿一貫目と石一貫目とどっちが重たいやろか？」などと、実は私の賢愚を試されているとも知らずに、よくこうしてなぶられ、また可愛がられもした。

英助爺さんが座っている座布団の下の板をめくると銭函になっていて、色々なお金がきちんと整理してあり、お釣りと言えば、いつでもそれぞれのお金が揃うようになっているのを見て、「えーしやなあ。(お金持ちやなあ)」と思うたものである。

その頃は表に和気清麻呂、裏に猪のついた10円が、普通は最高で、100円紙幣など見たこともなく、百姓でお米でもたくさん売って、この得難い100円札でも一度手に入れば、皆にうやうやしく拝ませたものである。また、買い物に行き和気公でも出すと、釣り銭に困るのを知っていて、見せびらかしに来たのかと、とても怒られたもので、現在の1万円札以上の尊い価値を持っ

ていたものであったと思う。まず当時は一円銀貨より、50 銭、２０銭、１０銭、5 銭まで銀貨であったが、その後 5 銭だけ白銅となり、銅貨は 2 銭、1 銭、半銭 5 厘まで、なお 2 厘 1 厘の穴開き銭まで通用していた。

お得意先の名前を控えた大きな大福帳はいろは順で、名前の見出しには私の寺のことを大日堂と書いてあった。これもお寺というほどの資格は無いように、一般からは思われていたようである。それもそのはず、お寺の格は等外の二等地であった。現在農林政務次官、及び参議院議員の中野文門師が育った兵庫の範国寺と共に、我が明泉寺もその時分には一荷に荷うと棒が折れると言われたくらい、底抜けの貧乏寺であったのである。大日堂とあるところは、いつも白くて汚れていなかった。借りても払うのに困るから、実質に無理をしてでも、現金で買うことにしていたからなのであろう。

その頃は一年節季、半節季が月節季となり、終戦前後から現金取引となり、近頃はまた月払いが流行するかと思えば、十か月払いも珍しくなくなったが、私の子供の頃は貧乏でつらかったことが身にしみてか、今もなお現金でなくては買えないものは買わぬ主義で通しておる。ユーモア豊かなこの栄助さんには、覚さんという一人息子があった。この人の時代になると、この辺りにもいろいろの店屋ができたので、吉岡は次第に店を拡張して、他のものは売らずにお酒のダ売り屋となり大したものであったが、世は有為転変と惜しいかな、この家も空襲のために夢幻泡影の如くに消え去っていったが、栄助爺から四代目の曾孫はとても商売に熱心で、昔の吉岡に盛り返しつつあるが、覚さん時代の隆盛を迎えるにはなかなかであろう。とにかく努力家で愛想の良いことは、初代栄助爺さんに似て、なんとなく伝統の良さが窺える。

【長田に初めて豆腐屋】

ちょっとした日用品は吉岡で買えるが、盆とか正月、お祭りなどになると、大抵は兵庫か神戸の有馬道まで行かぬと品物が整わなかったのに、吉岡の向かいで、溝本と言う家が豆腐屋を始めたので、兵庫まで行かねば手に入らなかった豆腐が長田で買えると、とても嬉しく思ったものである。豆腐は僧牛と言って、坊さんのためには牛肉に値するものとて、和尚様がとても好きで、よく買いに来たものであるが、その後大正の頃になると、宮川町にも高田という豆腐屋ができた。白と焼きを豆腐屋独特の手桶に浮かして、箱には三角の厚揚げと薄揚げを入れた荷を肩にチリンチリンと大きな鈴を鳴らして、わずか十軒前後の明泉寺村までも売りに来られた。

寺へは特に「今日は？」と尋ねてくれるので、私は大助かり。というのは崩れ易くて滴が垂れるので、例えに「豆腐屋へも三里」などと言われ、冬の豆腐買いには困っていたのが、明泉寺村も豆腐だけは町並みとなった。

溝本の豆腐屋の奥に、同じく溝本安蔵という立派な家があった。豆腐屋とは母屋新宅の関係らしく思う。正面に土蔵があって、とてもきれいな家であった。昔、長田は上みんじょ、中んじょ、下んじょの三つに区切られていた。すなわち、お宮より西を上みんじょ、八雲橋を渡った馬場先の辺を中んじょ、この辺りは下んじょで、お寺も上は福聚寺、すなわち西の寺、中は長福寺東の寺、下は光堂寺とほぼ決まっており。溝本や吉岡は檀家の中でも大檀那株であったと聞いていたが、空襲でこの辺一帯もたった一夜の内に焼け野が原となった。嗚呼。

若かりし頃の安蔵さんにはこんなエピソードもあった。すなわち、この家の細君は奥の藍那村から来ておられたが、田舎でも箱入り娘であったらしく、色が白くて上品で、とても綺麗な女房さんであった。ある年のこと、安蔵さんはいつもの通り、細君の在所へ行くのに、明泉寺をへて鵯越の見返り峠（この峠で兵庫や神戸が見えなくなる）を越え、水なし池を右下に見ながら行

く道は、上下三里の鵯越峠の中でも、一番気持ちの悪い、寂しいところで、突然水鳥の羽ばたきを聞くと、維盛ならずともびっくりするようなところだが、昔からこの辺一帯に大蛇がおると、誰の頭にも先入観がある。不安なところを安蔵さんは足を速めていくうちに、ゾロゾロと何かが追いかけてくるような音を聞き、さてはとばかりびっくり仰天、命からがら走れば走るほど追いかけてくるようで、とても助からんと思いながらも、命からがら走るうちに音がしなくなったので、ちょっと後ろを振り向くと、黒い長いものが見えたので二度びっくり。早や精も根も尽きて、足も腰もすくんで走れない。時に我が身の小倉帯が解けて、着物の前がパッパになっているのに気が付くと、何のことや、ゾロゾロと大蛇が追いかけるように思ったのは、我が身の帯が解けて引きずる音であったかと思えば、あほらしいやら悔しいやらで、恐ろしい夢から覚めたようであったとのことである。

とにかくこの辺は気持ちの悪いところであったが、現在は公園墓地となり、水無池も近代化して筆者でさえも定かならぬまでに変わっている。

【村のかかりの家】

豆腐屋の下隣に山崎幸吉という家の土壁があって、その内側に大きなとんがり柿の木があった。秋になると青い葉隠れに赤い柿、柿右衛門ならずとも美しく、また一つくれたらなあ、欲しいなあと思った。こうした思い出の深い柿の木も、家と共に焼失して、思い出の種もなくなった。

なお、少し下ると火事の時に鳴らす半鐘があって、ここを左へ入ると、北村市松という人の家で、この家のことを前、またはカカリという屋号で呼んでいた。昔は公に姓を名乗り、腰に小刀のさせるいわゆる帯刀御免の家柄は、庄屋くらいなもので、他は皆屋号であったと聞く。

すなわち兵庫の方から長田の村へ入ってくると、一番先に火の見やぐらの半鐘と北村さんの家が見えた。ゆえに前、又はカカリの家といったものである。いかにも田舎の農家らしい感じのする旧家であったが、惜しいことに丸焼け、その後の市松さんの姿は見るも気の毒であった。

戦前には某若人が年に一度は必ず大日寺に詣で、馬のお守りを受ける人があった。あるときその人の住所なり姓名を聞くと長田の北村市松は私の叔父で自分は甥で、現在は満州のハルピン国際競馬場に勤めているとのことであった。その後、私は昭和１０年の５月、満州建国の年にハルピンを訪れ。沖貞助、横川正造両勇士の墓前に詣で、「父は天皇陛下の命により、この土地に来たり、不幸露軍のために囚われ、今銃殺の刑に処せられる」と最後のお言葉の碑文を拝読し、目頭の熱い時、思いがけなく彼の若人が馬を飛ばして来られ、「北村です、遠路よく来られました」と、労いの言葉を受けて大いに感激したことがあった。北満の守り神と祀られた両勇士の御最後も、帝政ロシアの権勢も今となっては、ただ一時の夢の戯れ、浮世の事は全てかくの如きか。

噫々。

【呑吐ダム】

新湊川ができる以前は、お宮の裏で取り入れた苅藻川の水は長田村の中心で、水神として祀られ、尚も下へ流れたものであるが、新湊川ができるについて、都合が悪くなったが、ぜひとも下へ流す必要があるために、考えたのが長田橋の北詰めに大きな会所を作り、やがて川底になる下にトンネルを作り、下にも上と同じ会所を設け、水神の森から流れてくる小川の水を、暗渠に落としてトンネルをくぐり、下の会所でモコモコと気味の悪い渦を巻いて吹き上げていた。一度呑んでまた吐き出すこの式を呑吐ダムというが、村の人は昼夜、不断にドンドン音がするので、会所のことをドンドンと言っていた。ドンドンを潜り抜けた水は、また元の静けさで清く流れる

小川で、夏はらっきょう、秋は里芋を洗っていた。四斗樽のぐるりに水の出入りする縦に隙間のある桶に、らっきょうでも里芋でも放り込んで、浮き上がらぬように、人は桶に跨り乗って、ちょうど大阪の市章のような形をしたものを両手にして、右に左にゴロリゴロリと、体の調子よろしく動かしての芋洗い。このような光景は今の都市では見られぬ風景で、今も目に浮かんで離れない。下の方では桶から飛び出たらっきょうや里芋の真っ白なのを拾う子供や、水清ければ魚住まずとは言え、時たま泥鰌や鮒を見つけるとたまらない。だが、なかなかこれが手に負えない。全く保護色で水と同じような色をしているから始末が悪いことおびただしい。

小川の水はこの辺でもなお清く、田畑を潤しながら東尻池の方へ流れたものである。

【湊川の付け替え】

長田前を東から西へ横切る新湊川に初めて通水式が挙行されたのは、明治 34 年 7 月 11 日であったと聞いている。湊川がなぜ長田前に付け替えられたかというと、現在新開地として賑わっている繁華街が、昔湊川であったときは神戸の裏山、天王谷および烏原谷の水が合流して、湊へ流れ込んだ故に湊川と名付けられたものと思う。この川は大水のたびに山から砂を運び、川底が次第に高くなり、そのために山陽鉄道でもトンネルで川底を走るのを子供は土手の上から汽車を見て楽しんだものである。

常は一滴の水もない綺麗な砂場で、毎年 5 月 25 日の楠公祭には建武の昔を回顧して、御神輿用の休み処で、終日大変な賑わいであったが、一朝、大水ともなると大事で名にし負う天上川なるが故に、右の堤防が切れると兵庫が泥海となり、左の堤が切れると神戸の側が大水害で、昔から再三再四、被害があったが、いよいよ付け替えに踏み切ったのは明治 29 年であった。即ち日清戦争に大勝利を得た翌年の 8 月は長雨が続き、最後の 30 日の豪雨で、菊水町の下で堤防が決壊し

たために。濁流は荒田から福原一体に流れ込み、遊女をはじめ大変な犠牲者で、人々を恐れ慄かしめた。今後、このような悲惨事が再び起こらないようにと、ついに会下山の下にトンネルを掘り、長田前へ誘導し、旧湊川に対し、新湊川と命名したものである。神戸の湊川と言えば、全国にその名を知られた川であるが、川そのものよりも建武3年5月25日、楠木正成、足利尊氏が戦いを交えた古戦場として有名なので、兵庫や神戸の市民には害あって益ない川であったかもしれない。市では旧湊川の一部を残し、湊川公園として建武の昔を偲ぶよすがとして保存されている。

【新湊川】

新湊川が出来た当時は、川幅も今の3倍以上も広く、堤防には松の並樹が繁り、春は若草摘みや河原遊びが出来、秋は草紅葉や虫の音と、野趣味豊かで流れも清き菊水の名に相応しい川であった。その後に現在は日本油脂株式会社と改まっているが、元は畑田虎之助氏が経営する松根油の会社、何に使用するのか南京袋、すなわち麻袋の中古品の片面に、松根油とコールタールを調合したようなものを塗り付け、川原に干し広げ、例えば、姫路の市川の川原に牛皮が干してある光景を見るようであった。

ところがある年の5月頃であったと思うが、長田橋も危ないと心配したくらいの大水が出て、その頃はまだセメントやコンクリートなどはなく、知る人もなく、土で堤防を築いていたために、東から西に向かって恐ろしい勢いで流れてきた水は苅藻川との合流のところで、西側の堤防の横腹に突き当たり、堤が切れ始めた。ここが切れると光堂寺付近から下一帯は泥海になるために、これを防ごうとするが、なかなか意の如くならず、土嚢を作る人、防ぐ人、また何の役にも立たぬ野次馬が集まり、危険は刻々増すばかりで、夜になれば太鼓を叩くやら、篝火を炊くや

らで大騒ぎになったこともあった。

苅藻川と湊川の水はここで合流して、川尻のガス会社の東側を海へ流れ込んでいるが、太古はこの辺りを大和田の浦といったものである、と。

昔は北村市松さんの家が村のはずれで遠く、今の山陽と市電の交差点までほとんど一軒の家もなく、丁度交差点を中心に西に長田神社の建石。東に大勢の人の寄進による大きな灯篭があり、ここを長田の燈籠前と言っていた。その後、この寂しい道にも右のほうに豚小屋ができた。これは長田の旧家で谷川弥右衛門さんが経営していた。豚とは汚い臭い動物だと思った。豚と象とでは、同じ動物ながら大変な違いで、極端な対象動物だと思う。しかし、まだこの時分には、生きた象を見た人は稀であった。

やがて道路の左に初めて一軒、家が立ち、石灰や土管などの建築材料を売る店で、堤さんと呼んでいた。その後も長い間、この堤さん一軒きりであった。堤さんの跡が現在の昭文堂という本屋である。たしか尚文堂の細君は堤の娘さんだったと思う。堤の裏、東に高く聳える大伽藍は、姫路の亀山御坊までの間では見られぬという、西野即ち今の番町の金楽寺という御堂であったが、惜しいかな空襲で焼けたことは先に長田の鬼さんのところで述べたとおりである。

明治大正も過ぎ昭和となるに従い、この辺も次第に賑やかになり、畑田の脂会社の高いレンガ塀に寄り添うて売店ができ始め、終戦後は現在のような立派な商店街となってはきているが、後ろの煉瓦壁をうまく隠しているだけで、壁のうちは今も油の会社であるが、既に今は経営者も変わって畑田の経営ではなさそうである。会社の名も時代色を帯びて、日本油脂株式会社と改まっている。

【監物太郎頼賢（けんもつたろうよりかた）の塚】

また、今の神戸銀行のあたりも、昔は水田で田んぼの真ん中に塚があって、大きな柳の木があり、作物は日影になるが、昔の人は不平も言わず、不平を言うてはかえって祟りがあると思い込み、枝さえ伐るものも無く、「一抱えあれど柳は柳かな」で、風に吹かれ、吹かれるままに西東、時にはこの大木の柳の影は、一入り寂しい感じさえしたものである。

その後、兵庫の本町通りで南條荘兵衛という紙の卸屋の主人が、この一角に塚を中心に小院を建てて南條院と称して、この草庵で余生を墓守で終わられ、現在は監物町とまでなって、永久にお祭りができているが。今ではただお墓と町名のみが残り、周囲は家が建て込んで、昔の面影は跡形もない。この塚の主は監物太郎頼賢という。主君平家方の総大将知盛卿の長男の武蔵守知章の身を護って、共に討ち死にした若武者である。

時は寿永３年２月７日、平家方の総大将新中納言知盛は生田の森の合戦で、源氏の大将範頼の軍に敗れ、わずかに残る一子知章と頼賢の三騎は西に向いて、平野、石井、夢野をへて、鵯越の坂口に陣を構える剛の者教経を頼りに来て見れば、源氏の義経は高尾山より道を転じて、白川へ下ったことがわかった。教経は無念とばかり、人を引き上げた後であった。仕方なく現在の明泉寺町（当時の明泉寺はまだ丸山の奥、中一里山にあった)、名倉一体を守る盛俊を力にと来てみれば、これまた猪俣小平六のために討たれた後であった。

知盛はやこれまでと思いしが、一子知章がいさめと強いての頼みに思いとどまり、敵に背を見せるは死にまさる武人の恥なるが、主上をはじめ、平家一門のことを思えばやむなしと、頼賢に知章の身を託し、心ならずも御座船さして落ちてゆく。

父を助ける為に踏みとどまった知章は敵を防ぎ戦ううちに、哀れ16歳の花は無惨に散るを見るより、頼賢仇をとって抑えて首を掻き、仇を取り、なお知盛の身を思い、追いすがりゆくうちに精根尽きてここに倒れしを、里人その忠節を哀れと思い、墓碑を建て霊を慰め、今に至るものと思う。

南條院の浜隣り、すなわち山陽街道に向かい、西北の角に、昔は横井の車とて、上は明泉寺大日寺の下で取り入れた苅藻川の水が前田、中島、北作といくつかの水車を回し、最後のどん尻水車を回した水は、初めてここでお役御免となり、でもなお幾多の田畑を潤し通して、東尻池村の方へ流れたものである。故人はこうした水の利用にも、随分と苦心して効果100%に活用し、上手く利用されたものである。

この水車への入り口の角に長田神社への石標と対象に、大石灯籠が左右に建ち、ここも長田の灯籠前と呼んでいた。すなわち、長田さんや村への入り口でもあった。石柱には式内長田神社と深く彫られ、右側の大勢の人の寄進によって献納された、大石灯籠の脇に寄り添うように、ささやかな茶店が裏の坪池に臨み、夏は肘掛窓にもたれ、坪池から吹き込む風に涼み、１本１銭のミカン水を飲んだり、秋から冬になると蒸し芋や、丸焼きや、焼餅で、道行く人の足をここに止めていた。筆者も子供の頃、兵庫からの帰途、背の荷物を灯篭の段に降ろして、よく休んだ憩いの場でもあった。

その後、時代の変遷につれて道路の拡張と山陽と市電の交差点の中心となるについて、灯籠は今の長田橋の東詰まで引き移されたが、いつの年であったか付近に火災が起こり、灯篭も火中にあってボロボロになったらしく、火事の後片付けと共に灯篭も片付けられて、今では影も形も無くなってしまった。ただ、石柱のみは商店街と村野工業高校への入り口の角に移され、ありし

昔を知る者のごとく立っているが、この石柱は明治１０年１月建立とあるから、昭和 43 年 10 月 23 日が慶応 4 年からちょうど明治百年であるから、さして古いものとは思えない。

地下の人、道畑佐市氏の回顧 60 年誌にこの辺りの写真を、また記事を拝見したり、神戸美術館館長荒尾親成氏所持の増田山から長田のお宮、遠く明泉寺の大日堂より鵯越を望む写真を見ると、昔がひといり懐かしく。明治は遠くなりにけりの感を深める。

その頃は車といえば朝の肥え取り車と、時折り牛車が通り、早いものといえば人力車よりほかになく、したがって街は静かで、交通事故などという文明の人災など聞いたこともなく、交通地獄など、なおさら夢にも思ったこともなかった。ところが、今日では最も恐ろしい、油断も隙もない、命がけでウロチョロせねばならぬ。親不知子不知の険となってしまった。坪池もその後、塵芥で埋め立てられ、広場となったなりで、50 年から空き地のままであったが。昭和 36 年頃の秋になって、初めて山陽の地下鉄と上は国道にと広い道路に変わりつつあったが、昭和 43 年 4 月、ついに山陽の路上電車は 4 月 7 日午前 0 時 7 分、兵庫駅発の終電車を最後に廃線となり、地下へ潜り、神戸高速長田駅が昔の坪池の直下にできて、ここから全国各地への連絡も可能という便利なことになり、筆者は三ノ宮の国際会館での釈尊お花祭に詣でるのに初乗りして、おっかなびっくり大まごつき。昔懐かしき長田の灯籠前の呼び名も、水清き坪池の風景を知る人も年ごとに亡くなり、また昔を語る人も絶えて、思えば夢のようで、昔を思えば現在は恐ろしい交通地獄と、変われば変わる有為転変の世相とは、転た今昔の感に堪えない次第である。私はここで懐旧の思いとともに踵を返し、明泉寺へ戻る道すがらに筆を進めようと思う。